短信
佐藤勢紀子/アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 15(2023)50-53

非母語話者を対象とする近代文語文教育の最前線
―BUNGO-bun project 第 6 回研究会報告―

佐藤勢紀子

要旨
非日本語母語話者への文語文教育のあり方を探究する BUNGO-bun project の第 6 回研究会を 2023 年 2 月にオンラインで開催した。大学関係者を中心に国内外から 50 名の参加があり、「近代文語文教育の最前線」というテーマで 2 つの報告と討論が行われた。報告では、留学生への日本語教育の一環としての近代文語文教育の事例、日本語論文を読む必要のある中国学専攻学生に対する海外での近代文語文教育の事例が紹介され、近世以前の素材を用いる通常の文語文教育との違い、受講者の特質に応じた指導上のポイントが示された。事後アンケートの回答では、近代文語文から文語文を導入する指導法の可能性に言及するコメントが多く見られ、BUNGO-bun project の今後の活動への期待が寄せられた。

キーワード
非日本語母語話者、文語文教育、近代文語文

1. 研究会開催の経緯
1.1 BUNGO-bun project
文語文を学ぶ必要がある、あるいは文語文に関心がある非日本語母語話者は、日本研究志望者を中心に世界各地に存在するが、その教育環境は、日本国外はもとより国内でも十分に整っているとは言い難い。文語文教育に携わる教師間の連繋も薄く、それぞれが問題を抱えつつ手探りで教えているというのが一般的な状況である。

そのような状況をふまえて、報告者は、非母語話者に対する文語文教育の関係者のネットワークを形成し、ノウハウを共有しつつ教育の質を高め、文語文教育研修システムを構築することを目指して、2020 年 8 月に BUNGO-bun project を立ち上げた。同プロジェクトでは、これまで、5 回の研究会、4 回のトークフォーラムを開催し（佐藤他 2022、佐藤他 2023）[(1)]、bungonet [(2)]を通じて関係者間の情報共有、交流の促進を図っている。

1.2 近代文語文に関する研究会の企画
過去の 5 回の研究会では、それぞれ「オンライン化で生じた課題と可能性」、「オンライン教材を考える」、「漢文訓読教育の意義と課題」、「くずし字教育の意義と課題」、「文語文リテラシーの育成」というテーマを掲げ、専門家による報告とそれに関する討論を行った。第 4 回までの研究会で古文、漢文、くずし字という、文語文教育で扱うべき三大要素をとりあげ、さらに第 5 回研究会でそれらを包摂した研修のあり方について考えた。

第 6 回研究会では、文語文教育について新たな切り口から検討したいと考え、「近代文語文教育」をとりあげた。このテーマを選んだ背景には、近代の日本をフィールドとする研究者の意見、そして近年における近代文語文教育関係の書籍の刊行がある。報告者はオ

ンライン教材“BUNGO-bun GO!”[3]の開発に先立ち、海外の日本学研究者を対象に文語文教育に関するニーズ調査を行った。その際に、学習環境の一つの問題点として、19～20世紀の文語文法を学ぶための教材が殆どないことが指摘された（佐藤 2015、pp.167-169)。この問題の解決に寄与すると思われたのが、庵（2020）および NAZIKIAN et al.（2023）の刊行である。後者は第 6 回研究会の企画の段階では未刊行であったが、両書の著者を招いて近代文語文に焦点をおいた研究会を開催することが必要であると考えた。

2. 研究会の概要

2.1 開催日時と参加者

BUNGO-bun project 第 6 回研究会は、2023 年 2 月 18 日（土）21:00～23:00（日本時間）に Zoom によるオンラインで開催された。主催は BUNGO-bun project、共催は東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本語教室である。

開催に先立ち、bungonet、EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）のメーリングリスト等を通じてプログラムを周知した。研究会の参加者は 50 名で、その内訳は、母語では日本語 24 名、日本語以外 26 名、身分では大学教員 26 名、元大学教員 2 名、大学非常勤教員 6 名、ポスドク 1 名、大学院生 10 名、研究生 1 名、その他 4 名であった[4]。

2.2 プログラム

第 6 回研究会のプログラムは以下のとおりである。

第 1 部　事例報告―近代文語文教育の最前線

報告 1　庵功雄（一橋大学）「一橋大学における文語文教育―日本学・日本研究を専門としない留学生に対する教育の例として」

報告 2　小野桂子（プリンストン大学）「中国学研究論文を読むための近代文語文教育―プリンストン大学における実践」

コメント　Orion Klautau（東北大学）

第 2 部　ディスカッション・情報交換

2.3 報告と討論の内容

ここでは、事例報告とコメント、それに続く討論の内容をごく簡単に紹介する。

報告 1 は、日本語教育の専門家である庵功雄氏による一橋大学での実践報告であった。日本学専攻ではない上級レベルの学習者を対象とした、福沢諭吉や中江兆民の著作を読む授業の概要が示され、文語の連体形の用法に着目した「形態素対応主義」に基づく指導法が紹介された。近代文語文を素材とすることが、内容的には受講者のアクチュアルな問題意識につながり、語学的には現代語との深い関連を理解させやすいとの認識が示された。

報告 2 は、プリンストン大学で古文と漢文の授業を担当する小野桂子氏によるものであった。文語で書かれた日本語論文を読む必要のある中国学専攻学生[5]を対象とした、2 学期で論文読解の基礎作りから近代文語文読解に至る授業が紹介された。文法用語をどうするか、文語文法の何を選んで教えるか、どのように教えるかという 3 点から近代文語文の指導方法が論じられ、英語への翻訳のタスクを含む練習問題の実例が示された。

事例報告に続き、近代日本思想史研究者 Orion Klautau 氏による、コメンテーターとし

ての発言があった。自身の学習経験、東北大学大学院国際文化研究科での留学生の指導経験をふまえて、非母語話者に対する近代文語文教育の環境整備の必要性が指摘された。

第 2 部では、約 1 時間にわたり、報告者との質疑応答を中心に、近代文語文教育についての討論が行われた。報告者を含め 10 名の参加者からの発言があった。主な論点になったのは、日本学専攻でない学生の学習意欲と到達度、文語文を英語に訳させることの意義、近代文語文から文語文を導入する指導法の可能性、中国語母語話者への漢文訓読教育の必要性などであった。このうち近代文語文から文語文教育を始めることの是非については、学習者の特性に応じて考える必要があることが指摘された。その他、海外の大学教員のコメントとして、現代日本語にも古語が残っていて日本語能力試験 N1 にも出題されるため勉強しながら教えている、中国人学生にどのように漢文を教えたらよいかという問題を自身でも経験しているので勉強になった、などの発言があった。

3. アンケートの結果

3.1 事後アンケートの実施

研究会終了直後に、参加者を対象にグーグルフォーム（無記名）もしくは E メールによるアンケートを実施した。質問は、1)母語（日本語／他）、2)身分、3)満足度、4)今回の研究会で特に印象的だったこと、5)・6)各報告についてのコメント、7)今回の研究会や BUNGO-bun project についての感想・意見、の 7 項目とし[6]、1)～4)の回答を必須とした。提出期限までに 31 名（母語話者 13 名、非母語話者 18 名）からの回答があった。

3.2 アンケートの回答

まず、質問 3)の研究会への満足度については、フォームでの回答者 28 名[7]全員が「1」(満足できなかった)～「10」（とても満足した）の中で「7」以上を選択した。そのうち「9」もしくは「10」を選んだ特に満足度の高い回答者は 20 名で 71.4%を占めていた。

次に、質問 4)への回答に示された、印象的だったことの一端を紹介する。実践報告については、授業内容がそれぞれの受講者のニーズに合わせてよく考えられているという趣旨のコメントが 3 名からあり、説明が非常に明確で詳細である、発表のレベルが高い、などの評価もあった。討論については、「質疑応答の時間も非常に有益で、大変勉強になった」、「世界各地における日本近代文語文教育の現状について意見交換できた」などのコメントが見られた。討論の論点については、近代文語文から文語文を導入することについての議論が印象的だったという趣旨のコメントが 5 名から寄せられた。

最後に、質問 7)への回答では、「勉強になる」、「興味深いトピック」などの短評のほか、次のような具体的な感想、提言も見られた[8]。

- 普段教えている時に気がつかなかったことや、使えそうな教材、教授法を伺い、大変よい勉強になって達成感のある研究会だった。
- 質疑に余裕をもった全体構成をされていましたので、先生方のご発言ややりとりをじっくり考えながら伺うことができたと思います。
- 続けてほしい。幅の広いテーマ、経験や教師を紹介するように。

3 つ目のコメントを含め、今後の活動への期待を示すコメントが 7 名の回答者から寄せられ、BUNGO-bun project の活動を継続していくことの重要性を認識させられた。

4. 今後の活動に向けて

以上、「近代文語文教育の最前線」というテーマで開催した BUNGO-bun project 第 6 回研究会について、その概要と参加者の反応を報告した。今回の研究会は、従来よりも非母語話者の参加率が高かった。このことは非母語話者の近代文語文への関心の高さを窺わせるものであり、また国内外での様々な教育経験を背景とした多様な見地からの意見交換に結び付いていた。今回の研究会では近代文語文からの文語文導入が論点となったが、どの時代から入るにせよ、文語文の導入に効果的な教材の選び方、その利用法については、さらに検討が必要である。今後の研究会やトークフォーラムでの検討課題としたい。

（佐藤勢紀子さとうせきこ・東北大学・sekiko.sato.e8@tohoku.ac.jp）

付記

本短信で報告した研究会は、科学研究費助成事業基盤研究(C)20K00720「非母語話者の文語文学習支援のためのシラバス・教授法開発および研修システムの構築」（2020 年度～2022 年度、研究代表者：佐藤勢紀子）による助成を受けて開催されたものである。

注

1. ただし、佐藤他（2022）は第 3 回までのトークフォーラムの実践報告である。
2. 非母語話者に対する文語文教育の関係者のメーリングリスト。2023 年 2 月末時点の登録者は 113 名となっている。
3. https://bungobungo.jp/
4. 国別では、日本、韓国、中国、台湾、ロシア、ルーマニア、スロベニア、スイス、イタリア、アメリカ合衆国の 10 の国／地域からの参加があった。
5. プリンストン大学で 1 年以上（または同様レベル）の現代日本語と上級現代中国語を学んでいることが受講条件となっている。
6. その他、bungonet への登録に関する質問も設けた。
7. E メールによる 3 名の回答は記名であるため、3)の満足度のデータからは外した。
8. 質問 5)、6)への回答についての報告は、紙幅の関係で割愛する。

参考文献

庵功雄（2020）『留学生のための近代文語文入門―現代の日本と日本語を知るために―』スリーエーネットワーク

佐藤勢紀子（2015）「文語文を学ぶ日本語学習者が困難を感じる点―非漢字系日本語学習者に聞く―」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』1，163-172.

佐藤勢紀子・虫明美喜（2022）「日本語非母語話者への文語文教育を語る―トークフォーラム「かだらいん」（第 1 回～第 3 回）実践報告―」『東北大学言語・文化教育センター年報』8，1-9.

佐藤勢紀子・虫明美喜（2023）「日本語文語文リテラシーの育成―BUNGO-bun project 第 5 回研究会報告―」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』9，181-191.

NAZIKIAN, F., ONO, K., & TATSUMI, N.(2023) *A Practical Guide for Scholarly Reading in Japanese*, Routledge